

News Letter

*Fair is foul,
and foul is fair*

国際交流センター所長 塩谷清人

もちろんこれはシェイクスピア作『マクベス』の冒頭の魔女のせりふです。この言葉は矛盾しているようですが、じつに興味深いと思います。ふつう「きれいは汚い、汚いはきれい」と訳されていますが、「正は悪なり、悪は正なり」という訳もあります。魔女の言うように、正が必ずしも正にならないことは、世界史で、正義の名の下に一つの国があとから考えると誤った選択をし、それがもとで何度も戦争が起こっていることから分かります。現実には善悪、正邪の二元論で判断つきかねることのほうが多いと思いますが、国によってはそのように割り切ることを求められている場合があります。

そのことを昨夏旅行したアメリカで感じました。よく笑話に外国人旅行者もアメリカでは道を聞かれるといわれますが、それほどアメリカは開かれた国で、人種の坩堝（るつぼ）です。そのような国ですから、国を統一させるために人権と民主主義という基本原則をもとにルールをしっかりと決めております。そのルールで選ばれた大統領は国を代表し、その存在は絶大です。大統領もそれを誇示するパフォーマンスをします。反対意見を言うひとがいても、大統領の決定は基本的には正しいと見られ、大多数の人（silent majority）は従います。それが民主主義だからです。このように割り切っております。

ある一つのことを決めたら徹底させます。良くも悪くもそれがルールだからです。空港での感じの悪い身体検査のことでわたしがアメリカの知人に文句を言いましたら、搭乗員全員の安全のためのルールなのだから仕方ないと言われました。そのときも彼女はそうするのが「フェア」なことなのだと言っておりました。このようにアメリカ人は何事においても「フェア」ということをさかんに言います。

大学でも同様に明解なルールのもとに学生は行動しています。その意味では外国からの留学生もフェアに扱われ、不平等な扱いはしません。（先生の中には人種差別をするファウルなひといるでしょうが、それは例外です。）留学生は語学などハンディがあるから大変ですが、そのような学生をサポートするシステムもしっかりしています。それが受け入れ側のフェアな姿勢でしょう。そのかわりルールを守らないと退学させられる、その厳しさは日本以上です。ルールを知らなかったというのは通用しません。ただそのようなアメリカ流の思考に慣れてしまえば生活も楽でしょう。ルールさえ守っていれば、個人の生活にまで干渉してきません。

シェイクスピアの名言もさることながら、「郷に入れば郷に従え」というのは至言だと思います。

vol. 15
April 1, 2005

CANADA

Simon Fraser University
Vancouver Community College
University of British Columbia 留学

法学研究科法律学専攻 博士前期課程2年

由井 一成

O Canada! Our home and native land!

カナダと聞いたときにどのようなイメージが浮かんできますか? 寒冷な気候、イヌイット、メープルリーフ、ナイアガラの滝、赤毛のアンなどといったものが挙がってくるでしょうか? その中でも特に見逃せないのが、カナダの社会的・文化的特徴として存在する「モザイク国家」性です。北米はいわゆる移民の国です。世界各地から希望を持った人々が北米に移り住み、そこで夢を追います。アメリカ合衆国は「人種のつぼ (melting pot)」と言われ、多種多様な人々の融合が強調されますが、カナダはより個々のバックグラウンドに誇りを持ちつつ、また同時に自分がカナディアンであることに對してもプライドを有するという点で、アメリカ合衆国とは若干異なります。カナダのような国においては、個々を統一的なものへと同化させ、同類項的意思を高めるよりも、お互いを尊重しそれぞれの違いを肯定しあいつつ、仲間意識を醸成させる傾向が強く見られます。そこにカナダという国が有する人権に対する認識を垣間見ることができるのではないのでしょうか? 人権問題、特にマイノティーの人権について研究を進めていた私にとって、カナダはとても興味深い国でした。

そのようなきっかけから、カナダの文化や法律などについて学ぶ、2年間の留学生活が始まることとなりました。カナダでしか得ることのできない貴重な知識・体験を、文化的・法的側面を通して得ることが今回の最大の目的でした。

私の留学先は2010年冬季オリンピック開催地のバンクーバーでした。そこは西海岸ということもあり、ヨーロッパからの移民はもちろんのこと、中国をはじめとするアジア系民族も多く居住しており、同時に中南米からの留学生なども多く、まさに象徴的なモザイク都市といえます。したがってカナダの文化というよりも、世界各国の文化を見渡すことのできる、私にとってはおあつらえ向きな街でした。しかしながら、モザイク国家において描かれる理想と現実には確実に違うことも実感させられました。すなわち、これほどまで数多くの人種・民族が交わりあう地域においても、他民族に対する根強い差別意識といったものは、少なからず存在していました。社会構造を概観したとき、そこでヒエラルキーの上部を占めるのは、たいていの場合において白人です。それはまさしく、あらゆる場所において存在する、弱者に対する人権意識の欠落という世界的傾向であり、バンクーバーでも決して例外ではなかったと思います。モザイク国家という言葉がもたらすステレオタイプから、私はバンクーバーという地に、人権が保護された理想郷を想像していたのでしょうか。百聞は一見に如かず、まさに飛び出してみなければ現実を知ることはできません。

しかしこのような現実を目の当たりにしたことは、決してネガティブなことではなく、むしろ改めて日本を客観的に観察する目を養ってくれた気がします。すなわち人口のほぼ全てを日本人が占めること日本においては、往々にしてマイノティーが存在することすら無視され、社会全体において日々人権問題が話題にのぼることにはないと感じます。一方カナダにおいては、それは常々人々が意識するところであり、したがってやはり人権問題に関する議論は、市民レベルにおいても前衛的なものとなっていたように思います。だからこそ「外国人」というマイノティーグループに属していた私も、2年経った頃にはバンクーバーという地にすっかりと馴染むことができ、そこに強い愛着を感じるに至り、現在では私にとっての第2の故郷となったのでしょうか。

異国の地に足を踏み入れることは、大きな不安を抱えることであり、また同時に力強い勇気を要することでもあります。留学生活の中では、躓くことも挫折することもあると思いますが、留学生活を終えたときに、自分自身の中で何かを身につけることができた、成長することができた、と思えば、きっとそれは有意義な体験として、その先の人生に必ずプラスとなって働くことでしょう。まずは行動を起こしてみてください。見ず知らずの場所に飛び込んでみてください。やがてそれは皆さんにとってかけがえのない経験となるものと信じています。



下宿先でのホームパーティーにて(右端が由井さん)

英語圏留学特集!

留学先として最も人気があるのは、やはり英語圏です。しかし、一口に英語圏と言っても、イギリス、アメリカを始め、オーストラリア、カナダなど、英語そのものが異なるだけでなく、文化や国民性も大きく違います。英語圏へ留学した皆さんの体験談をお届けします。ぜひ参考にしてください。

(注) 学生さんの所属は



Arizona State University 留学中

経済学部経済学科3年

細川 均

What made me decide to go to U.S.A.!!

私がアメリカ合衆国に留学しようと思ったのは、成人式の夜です。一浪してから大学に入ったものの、あまりはりのない生活をほぼ一年間送っていました。高校、予備校と自分の目標に向かって頑張っていたのに、大学入学とともに自分の目標を失ってしまいました。自分の中でも『これでいいのだろうか?』という疑問を抱きながらも、遊びほうけ、ただただ時間を浪費していました。そんなときに成人式で昔の友達と久しぶりに会って、いろいろな話(いまやっていることや将来の目標)をしていくうちに『このままではダメだ!! 昔からやってみたかったアメリカ留学を本気で考えてみよう』と自然と心は決まりました。なぜアメリカなのか? これには3つ理由があります。

1. 父親が仕事柄海外に行くことが多く、特にアメリカに行き仕事をするが多かったため、私の中でビジネスの中心はアメリカだというイメージがあったこと。
2. 他の英語圏(イギリス、オーストラリア、ニュージーランドなど)に比べて、多くの国の人が集まっているため、より多くの刺激を受けられるのではないかと考えたこと。
3. 入学資格に必要なもの(TOEFL®のスコアやGPA)などの基準が他の国に比べて低かったこと。そして Semester が始まるのが、9月というのも留学を決めるひとつの要因でした。

実際に留学してみて、良い意味でも悪い意味でも私を持っていたイメージとのギャップを感じています。まずプラス面から話すと、私が留学しているアリゾナ州立大学は、本当に世界中から多くの学生が集まり学んでいます(例えば、私が所属しているラグビー部はオーストラリア、スコットランド、カナダ、ドイツ、イラン、韓国、南ア

AUSTRALIA

平成16年度ニューサウスウェールズ大学派遣学生
法学部政治学科3年
鈴木 香緒里

GO AUSSIE !!!

1. はじめに

留学において、充実感・達成感を得るためには、自分で目標を立て、それに向かって、挑戦し実行することに尽きると 생각합니다。高校生の時にアメリカに1年間のAFS留学をした私にとっては、今回の大学協定留学が、2回目の留学生活となりました。帰国後に、留学生活の達成感が高いものであれば、それが新たな自信へと繋がるのではないかと思います。

このレポートを書くにあたって3つの点に絞り、私の留学生活を振り返ってみました。

2. 留学先の決定

私の場合は、オーストラリアを選んだというよりも国立ニューサウスウェールズ大学(UNSW)を選んだと言えます。主な理由は2点挙げられます。

まず、1つ目の点は、UNSWには約5人に1人が海外からの学生であるために留

学生にとって整った環境を備えているところです。恵まれた環境での留学生活は大変過ごしやすく、特に学業面においては毎日とてもいい刺激を受けられたと思います。例えば、大学図書館の中にLearning Centreという所があります。そこでは、エッセイの書き方、ノートの取り方、プレゼンテーション・スキルなどのコースをUNSWの全学生に無料で提供しています。これは、International Studentsが多いUNSWならではのサービスだと思います。私も初めの約2ヶ月、授業以外の時間には、このLearning Centreのコースをたくさん予約し勉強しました。

2つ目の点は、UNSWはインターンシップを大変奨励している大学であるということです。大学生生活で勉強した内容や能力を社会で実際に使うことで実力がついていくと考える方針から、ARTS2000Internshipという科目があります。この科目の履修を希望する学生は、1学期の初めから様々なプロセスを乗り越えて初めて2学期からインターンシップの履修が可能になります。このインターンシップを希望する方は1学期始めのオリエンテーション中の説明会に忘れずに行ってください。私の場合は、JETRO(日本貿易振興会)のインターンシップに合格し、週2日フルタイムでインターンシップをさせて頂くという貴重な経験をしました。こちらでの大学の授業やホーム・ワークは日本の授業と比べものにならないくらい量が多く採点もとにかく厳しいという現実であるのにも関わらず、インターンシップを両立できる環境を備えてくれている大学がUNSWです。

3. オーストラリア留学生活におけるプラス面、マイナス面

UNSWには様々な国籍の学生がいるため、マルチナショナルだという点ではプラスです。しかし、お互い居心地が良いのか大学内においても大学外においても、国別に分かれて行動している光景がよく見られます。そのような環境だと、留学していても日本人やアジアのグループに入って過ごすことの方が簡単で、そこにおさまってまいがちです。この点は留学生にとってはマイナス面だと思います。オーストラリア留学に来たからには、やはりオーストラリアの学生と交流することが国のことを知る第1歩です。実際に、私は、留学を終えてみれば、オーストラリア人の友人がほとんどで、本当に彼らの明るさに助けられ寂しいなど1回も感じたことはなかったと思います。マイナス面とプラス面は本当に紙一重です。両面をきちんと理解しながら生活を楽しむことが、留学のコツではないかと思います。

4. 私の留学内容

私の今までの人生の中で1番充実していた1年と言える、この留学は、毎日毎日がドラマのようなエピソードがたくさんつまった日々でした。

特に、授業は興味深く教科書を読むのが本当におもしろく、苦になりませんでした。確かに初めころは課題として与えられる大量のリーディングは大変でしたが、いつかはスラスラ読めるようになるのだからと思って、がんばりました。宿題をやる時間や、授業、セミナーの時間はとにかく集中して、他の自由時間はオーストラリアの素晴らしい天候の下で、友人たちと体を動かすことが日課でした。寮の中庭でクリケットをやったり、キャンパス内をローラーブレードで周ったり、キャンパスから徒歩でビーチに行って泳いだり、キャンパス内にあるジムに通ったりなど楽しみました。学年の最後には学習・試験期間合わせて1ヶ月に渡る最後の山場があります。その最後の山を乗り越え1年間の留学を終える、最終試験の終了の合図が聞こえたときの感動は忘れられません。それが終わってからの友人たちとのセントラルコーストへの旅行は1年間の留学生活を締めくくるに値する最高の時間でした。

5. 留学を終えて

帰国後、本当に1ヶ月2ヶ月「あつと」という間に時間が過ぎてしまいじっくりと振り返る機会がなかったので、こうやって留学体験記を書く機会を与えてくださったことをうれしく思います。今後、協定留学で学習院大学から国立ニューサウスウェールズ大学に留学する後輩が多くできることを楽しみにしています。



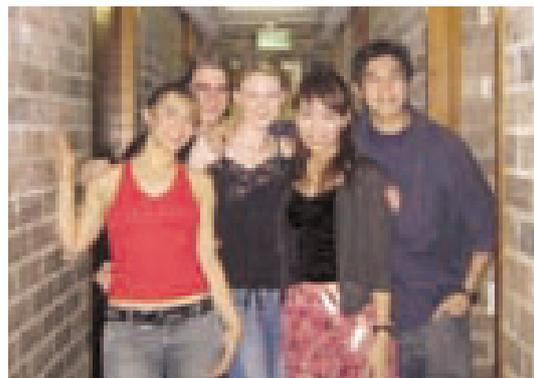
試合後のASUラグビー部の仲間たち(中央、オレンジ色のシャツを着た学生が細川さん)

アフリカなど多くの留学生がいます。それぞれが異なった文化の中で生まれ育ったため、異なったものの考え方をします。自分の中では当然だと思うことが彼らにとっては常識外であることが多々あります。こういった体験を通して自分の視野を広げ、いろいろな人の意見を受け入れられる柔軟性が着いてきたと思います。そしてアメリカ人は本当によく学び、よく遊んでいます。月曜から木曜までは授業の予習・復習で夜中まで図書館にカンヅメなのですが、金曜、土曜の夜は人が変わったように遊びます。あちこちでパーティが開かれ、一週間のストレスを発散するかのように飲み騒ぎます。私にはこのようなメリハリの効いた生活が想像以上に合っているみたいです。

反対にマイナス面についてですが、アメリカには21歳未満は飲酒ができないという法律があるようで、ナイトクラブ、バーなどではIDをチェックされます。そのため21歳未満の人にはあまり面白くないかもしれません。私は幸運にも21歳だったため何の問題も無く、楽しくお酒を飲んでいました。

当初は英語を学びに来たという意識が強かったのですが、こちらで授業を受け、友達と英語でコミュニケーションしていくうちに英語を意識することは少なくなりました。その代わりにACCOUNTINGに興味を持ち、今はこの授業に重きをおいて勉強しています。日本に帰国後も会計の勉強は継続したいです。

最後に留学しようか迷っている人に一言。一度きりの人生、自分がやりたいと思うのであれば、チャレンジするべきだと思います。日本では得られなかったような刺激的な充実した毎日を送れることは間違いありません。



学生寮にて学友達と(右から2番目が鈴木さん)

各国の高等教育機関へ
留学を希望する場合は、
その国の言語について、
一定の語学能力が求められること
がほとんどです。

次世代TOEFL®が導入されます。

2005年9月から、英語でのコミュニケーションを重視し、4技能(聞く、読む、書く、話す)の能力を総合的に測ることができる、次世代TOEFL®(The Next Generation TOEFL TEST-TOEFL iBT)の導入が予定されています。ただし、日本での導入は2006年まで延期されました。TOEFL iBTの主な特徴は、スピーキングセクションの導入、インターネット接続による実施、オンラインでのスコア確認などがあげられますが、最新情報は、米国ETS公式ホームページ<http://www.ets.org/toefl/>で確認してください。

DELTA・DALF試験のシステムが変わります。

DELTA・DALFは、世界130カ国で実施されているフランス文部省認定フランス語資格試験で、全10単位で構成され、すべてに合格すると、フランスの大学の学部留学の際に、語学評価試験が免除されます。このDELTA・DALF試験のシステムが2005年9月1日より変わります。全6単位の構成になり、いずれの単位についても、出願資格は問わず、どの単位へも、いくつの単位でも出願できるようになります。詳細は、DELTA・DALF試験管理センター(http://www.ifjkansai.or.jp/delta_dalf_jp.html)をご覧ください。

2005/2006は「日本におけるドイツ年」です。

DSHは、ドイツの大学へ留学する場合のドイツ語能力を証明する試験で、ドイツの大学で行われているものです。試験内容は各大学により異なります。詳細は志望大学の外人局に問い合わせてください。ZMP/ZOP/KDS/GDSはGoethe-Instituteが授与する資格です。詳細は、<http://www.goethe.de/os/tok/jppruuf.htm>をご覧ください。TestDaFは、自国で受験することができるドイツ語能力検定試験です。日本では近い将来、ドイツ文化センター等で受験できるようになる予定です。詳細は<http://www.testdaf.de>を参照してください。

学習院大学海外留学奨学金について

本学では、留学費用を援助し、できるだけ多くの皆さんが留学のチャンスを得ることができるよう、上記奨学金を設けています。平成17年度からは採用枠がこれまでの12名から3名増え、15名になりました。平成17年度第2回目の募集については、国際交流センターのHPでお知らせします。

応募条件：教授会等で留学が許可されているか、もしくは海外の大学等へ出願中の者

奨学金額：1人 50万円(給付)

募集人数：15名(年間)

募集日程：

17年度

募集時期(応募締切)

応募対象者

第1回(平成16年12月)

留学期間が①H17年 4月～H18年3月の者

第2回(平成17年 6月)

および ②H17年10月～H18年9月の者

18年度

募集時期(応募締切)

応募対象者

第1回(平成17年12月)

留学期間が①H18年 4月～H19年3月の者

第2回(平成18年 6月)

および ②H18年10月～H19年9月の者

※ただし、①の者は第1回に応募するのが望ましい。

大学院学生国外研究発表援助について

本学では大学院学生の研究活動支援の一環として、海外で研究発表を行う学生に対し、10万円を限度に、費用の一部を援助する制度を設けています。平成16年度は下記の通り援助を行いました。平成17年度の募集については、国際交流センターのHPでお知らせします。

平成16年度大学院学生国外研究発表援助採用者(15名)

経営	博士後期	ムルシタマ	ティルタ	ヌグラハ
人文・史学	博士後期	菅野 恵美		
	日文	博士後期	魏 聖銓・柳 慧政・吉田 路子・	
			吉田 美登利	
心理	博士後期	山田 歩		
自然・物理	博士前期	松本 周子・薩川 秀隆・佐藤 雅春		
	博士後期	樋口 健介・立花 隆行		
化学	博士前期	益子 涉		
	博士後期	伊藤 淳二・大道寺 一憲		

国際交流センターボランティア募集および登録更新

国際交流センターでは、センター主催のイベント(留学生懇親会やバス旅行など)の企画・運営のお手伝い、留学生の相談相手、短期ホストファミリーなどのボランティアを随時募集しています。興味のある方は、国際交流センターまで来室の上、登録手続きをしてください。また、現在ボランティアとして登録している学生の皆さんで、引き続きボランティアを引き受けてくださる方は、4月末日までに国際交流センターにて登録更新の手続きをとってください。

News Letter vol.15

April 1, 2005

発行日/2005年4月1日

編集・発行/学習院大学国際交流センター

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

TEL.03-5992-1024 FAX.03-5992-1025

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/cie/index.html>

●編集後記● 今年4月の新入生を迎え、ついに本学の留学生も100名を超えることになりました。その多くが、中国や韓国からの留学生であり、日本語も流暢であることから、それ程多くの留学生が在籍していることに気づいている日本人の学生さんは少ないかもしれません。でも彼らは、異なる文化や社会の中で、日本人学生と同じ講義や試験を懸命にこなしています。海外に留学して多くのことを学ぶことも意義があるかもしれません。でも国際交流の場はキャンパス内にもあることを知ってほしいと思います。

[平成17年度国際交流センター運営委員]

所長 塩谷 清人 (文学部)

運営委員 水野 謙 (法学部)

〃 ブラウン フィリップ (経済学部・外国語教育研究センター)

〃 前田 直子 (文学部)

〃 荒川 一郎 (理学部)

〃 有川 治男 (教務部長・文学部)

〃 遠藤 久夫 (学生部長・経済学部)